

楽しい宿題・ひみつの宿題で詩を書こう

毎日、忙しい生活の中で、親も子どもに対して急がせたり、小さなことで怒ってしまったりすることが多くなっています。そんな親子が、ホッと温かい時間をもてる宿題をだしてみましょう。ヒミツの宿題、というだけで、子どもたちはワクワクします。お母さんに見破られたり、ヒミツでなくなることも多いのですが。

○どれを、「事前に通信や懇談会で、保護者に協力をお願いしておく宿題」にし、どれを、「家庭にはヒミツにして、子どもとワクワクしながら行う宿題」にするかは、学級の実態や保護者の状況に合わせて考えてください。

- ★「今日はひみつの宿題です。おうちの人に抱っこ（おんぶ・ギューしてもらおう）してもらってください。（体格や腰痛への配慮も必要。ギューと抱きしめる、も入れます。）
- ★「今日から一週間、いつでもいいから、家の人とお風呂に入って、背中を洗ってあげよう。」
- ★「秘密の宿題だよ。気づかれないように、お家の人の肩たたきか肩もみをしてくるんだよ。」中高学年には「その時、家の人に『宝物はなに？』と聞いてみよう。」も。
- ★「家の人に、〳〵のことを話しながら、お茶を人れてあげよう。」
- ★「一番きれいな落ち葉を探して、おみやげにして家の人にあげよう。」（秋に）

○他にも、母の日、父の日、敬老の日、勤労感謝の日などに、「お金を使わないプレゼントをしよう」という宿題を出したり、自分のアイデアでアレンジしてみてください。

「その時の、家の人の様子や表情をよく見て、話したことを忘れないできてね」という一言を話しておきます。宿題をだいたいやり終えた頃、「宿題をした時の場面をよく思い出して詩に書こう」と呼びかけて詩に書きます。宿題の場面を切り取ったり、会話を書きやすかったりする良さがあるのです。

この宿題ができなかった子どもは、別のことで「心の動いたことを書こう」と話します。事前に家庭に協力をお願いするときは、子どもの心を受けとめてほしい、「とっておきの話」「小さいときの話」などをしてほしい、と宿題に合わせて頼んでおくとよいでしょう。また、詩に限らず、じっくり作文に書く題材にしてもいいです。

○子ども・保護者への配慮も大切です

・一人親家庭や祖父母と暮らす家庭もあるので、家の大人ならいいよ、と話しておきましょう。

・身体・体重が標準以上の子どもたちが、悲しい思いをしないように、椅子に座つてのだっこ、ギューと抱きしめるハグなども話すと良いです。（親の腰痛、転倒防止も）

・お風呂は家庭の事情もあるので、事前にお願ひし、一週間くらい期間をとりましょう。

・抱っこや背中洗いの時に、子どもや親が小さい頃の話をしてもらえると、子どもの心に温かい思いといっしょに残る宿題になります。

「楽しいしゅくだい・ひみつのしゅくだい」の作品

だっこしてもらった

二年 せいや

ママにだっこしてもらって

こもりうたをうたってた。

ちよつとはずかしかった。

でも あったかかった。

ママは

「むかしをおもいだす」

といていた。

「だっこ」：・はずかしかった。でも あったかかった。

私も三年生になるくらいまで息子を、朝の出勤前に「三分間だっこ」をしていました。忙しい平日に、学校・学童から帰ってくる息子と、ゆっくりした時間をもてるのは、お風呂と寝る時の読み聞かせくらいでした。朝の「三分間だっこ」は、息子のためのようで、実は親も癒され、安心したゆったりした気持ちになるのです。

二年生でも恥ずかしかったり久しぶりだったり、「しゅくだい」という大義名分で、胸をはって「だっこ」してもらえる機会になります。特に、第一子に生まれた子どもは、早くから「だっこ」の権利を弟や妹に譲っているのではないのでしょうか。

だっこのしゅくだい

二年 ゆう太

だっこをしてもらいました。

おとうさんと、おかあさんに

してもらいました。

ひさしぶりにしてもらったから

おかあさんとおとうさんが

「大きくなっただし、おもくなっただね。」

と言いました。

いもうとも

「だっこ」

といました。おとうとも

「あーあ」

と言って、だっこをしてもらってました。

ぼくも、いもうととおとうとを

だっこしてあげました。

お兄ちゃんがだっこしてもらっているのを見て、だっこを要求する妹と弟です。そんな妹と弟を、自分がだっこしてあげるお兄ちゃんのゆう太君に感動します。ぜひ、「だっこ」のあたたかさを親子で味わう機会をつくってはいかがでしょうか。

いちようのは

二年 ゆき子

「おかあさん

このは きれいでしょ。」

「きれいなね。

ひさしぶりに いちよう見たわ。」

と おかあさんがいった。

わたしが

「ほんと」

と いった。

「もう いなかは、

こうようになっているかもね。」

と いった。

おかあさんの顔が

にこっと していた。

お母さんのたからもの

四年　　るい

タントントン

「ねえ、お母さんのたからものって何？」

「それは、子どもにきまつてるでしょ。」

「なんで。」

「だって　るいが生まれてきてくれたから、

ママになれたのよ。」

お母さんが言った。

「じゅんじゅん。」

体がほかほかして、心にひびいた。

たから物

五年 ゆうか

私は、お母さんに

「お母さんのたから物ってなに」と聞いた。

お母さんは

「家ぞくかな」

っていったからビックリした

お母さんに

「お金じゃないの？」

聞いてみた。

「だってお金、もっていないから、

たから物にはなんないよ。」

ってわらいながらいつていた。

私は（なるほど）と思った。

出典 『小学校国語・書くこと・二年』（大月書店）の一部を加筆修正しました。

文責 伊藤 和実